

矢祭町から見る暮らしの風景

筑波大学大学院 人間総合科学研究科

助教 上田孝典

水戸と郡山を結ぶ小さな単線列車「水郡線」は、私たちを乗せて自然豊かな山あいの線路を久慈川に沿ってゆっくりと進んでいった。今回の調査の目的地、「矢祭もったいない図書館」は、東館駅の目の前にあった。

「市町村の合併の特例に関する法律」（合併特例法）を呼び水に平成の大合併と称された自治体再編のうねりの中でも、合併しない選択をした自治体は矢祭町だけではない。2003年から「小さくても輝く自治体フォーラム」が開催されているように、北海道二セコ町、長野県栄村など、「自立したまちづくり」が高く評価され、独自の取り組みをしている自治体は全国に数多くある。こうした合併しない選択をした小規模自治体に共通するのは、「農林漁業によって国民の生存と生活を支え、この国の自然環境と文化の基礎を支えてきた」という我がまちの誇りを、「この国の土台である町村の名前」とともに守っていかうという信念である。（「小さくても輝く自治体フォーラムよびかけ」）いわば、経済資本に還元されない、中山間地域の暮らしの中で育まれてきた社会関係資本などの無形の価値を重視し、ローカルな固有性を基礎にする「里」の思想（内山 節）といえるだろう。

矢祭町は、その中でも2001年に全国で先駆けて「市町村合併をしない矢祭町宣言」を町議会で可決し、国や県からの依存脱却と自立を宣言した。それ以降、住基ネット不参加をめぐる経緯や行政サービスの見直し、役場職員の意識改革や町議会改革、住民主体のまちづくりと「もったいない図書館」建設など、様々な取り組みが注目を浴びてきた。現在も連日、全国各地からの視察が訪れているという。

本会報では、学生の視点から見聞した矢祭町の現状が報告されている。この調査では「生涯学習・社会教育学研究室」が主催する「地域と教育」研究会参加する大学院生、学類学生が中心となって、事前学習を経て2月17日に矢祭町を訪れた。

「限界集落」という名付けによって、過疎と高齢化で疲弊する中山間地域の厳しい現実とは日本の社会問題として広く共有されてきている。しかし、だからこそ現状を打破し、従来型の発展観とは異なる暮らしの「豊かさ」を目指す取り組みが各地で動き出している。その現状を学ぼうと計画された調査であったが、限られた調査の中で矢祭町の姿をどれだけ捉えられているのかは心許ない。しかし実際に現地を見て、話を伺うことで、学生それぞれが何かを感じ、記憶に刻まれたことと思う。事前学習で目にした華々しい評価とは裏腹に、厳しい現実を前に苦悩し続ける職員の姿も印象的だった。

改めて矢祭町の視察を受け入れていただいた町民の皆様、とくにお世話になった中央公民館館長角田孝雄氏、教育委員会生涯学習グループ片野一也氏、矢祭もったいない図書館館長金澤昭氏に感謝申し上げます。

「地域と教育」研究会では、矢祭町の動向を継続的に注視しながらも、全国の実践に目を向け、地域における学びの諸相を地域の中で考えていく。本会報では、その研究成果を記録し続けていくことにしたい。